

歩き続ければ、 大丈夫。

アフリカで25万人の生活を変えた
日本人起業家からの手紙

佐藤芳之 著

歩き続ければ、 大丈夫。

アフリカで25万人の生活を変えた
日本人起業家からの手紙

佐藤芳之
著

[著者]

佐藤芳之 (さとう・よしゆき)

ケニア・ナッツ・カンパニー創業者、オーガニック・ソリューションズ代表取締役社長、株式会社ニダフジャパン代表取締役会長。1939年生まれ。宮城県志津川町（現・南三陸町）で幼少期を過ごす。1963年、東京外国語大学インド・パキスタン語学科を卒業後、アフリカ独立運動の父、クワメ・エンクルマに憧れて日本人初の留学生としてガーナ大学で学び、修了後はケニア・東レ・ミルズに現地職員として入社。31歳で退職し妻子を連れて日本に一時帰国。「やっぱり、アフリカで何かやりたい」と決意し、32歳で単身ケニアに戻り、鉛筆工場、製材工場、ビニールシート工場など、小規模なビジネスを次々と立ち上げ、うち一つを最終的にケニア・ナッツ・カンパニーとして世界5大マカダミアナッツ・カンパニーに成長させる。2008年に同社をタダ同然でケニア人パートナーに譲渡したのちは、微生物を活用した公衆衛生・肥料事業をケニア、ルワンダで展開。アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、日本など、世界各地にあるビジネス拠点を飛び回る日々を送っている。趣味は水泳と草原で聴くマラー。著書に『OUT OF AFRICA アフリカの奇跡』（朝日新聞出版）がある。

歩き続ければ、大丈夫。

アフリカで25万人の生活を変えた日本人起業家からの手紙

2014年11月20日 第1刷発行

著者——佐藤芳之

発行所——ダイヤモンド社

〒150-8409 東京都渋谷区神宮前 6-12-17

<http://www.diamond.co.jp/>

電話／03-5778-7236（編集）03-5778-7240（販売）

装丁——遠藤陽一（デザインワークショップジン）

本文デザイン・DTP——大谷昌稔（パワーハウス）

製作進行——ダイヤモンド・グラフィック社

編集協力——井上健太郎

カバー写真——ゲッティイメージズ

印刷——堀内印刷所（本文）・慶昌堂印刷（カバー）

製本——本間製本

編集担当——鈴木円香

©2014 Yoshiyuki Sato

ISBN 978-4-478-02238-2

落丁・乱丁本はお手数ですが小社営業局宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。但し、古書店で購入されたものについてはお取替えできません。

無断転載・複製を禁ず

Printed in Japan

歩き続ければ、大丈夫。 ● 目次

はじめに ————— 1

東北の田舎から始まった私の軌跡 ————— 14

私がこれまでやってきたこと ————— 16

「何かやりたい」から始めよう ————— 25

「今はまだまだ」でいい ————— 26

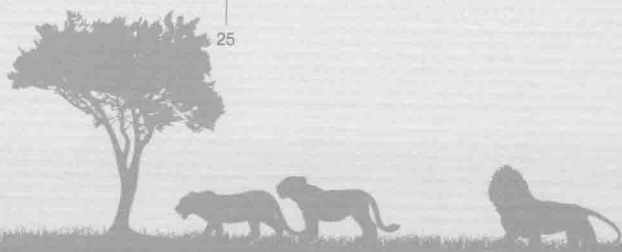
夢は膨らませすぎない ————— 33

自信には、根拠がないほうがいい ————— 39

最初から本気になれる人は、なかなかいない ————— 45

必死にやらない、夢中でやる ————— 52

【コラム①】どうしてアフリカだったのか ————— 56



第1章

考える前に走りだそう | 61

合言葉は「フット・ファースト」 | 62

身軽でいれば、チャンスをつかめる | 66

動けば、偶然が必然に変わる | 69

まずは「形」にしてしまう | 74

不安な時ほど、動いてみる | 77

行動力、決断力……「○○力」はいらない | 81

「バカになれる自分」を残す | 86

「コラム②」「工場で物をつくる」という原体験 | 91

第2章

やりたいことを形にしよう | 97

「ぴったりにくる理由」を見つける | 98

「自分のため」を超える | 102



消えない情熱を持ち続けよう

131

本当の「試練」は、つらくない

132

「六割人生」をキープする

136

ツツコミを入れる自分を持つ

139

幸せとは、日曜日の午後のようなもの

143

失敗がないとは、何もやらなかったということ

146

才能は「掛け算」で伸びる

106

「やりたいようにやる」が一番の近道

110

最初はみんなド素人

113

「石の上にも二年」ではない

118

自分に、もう一度チャンスをあげよう

121

「コラム③」「アウト・オブ・アフリカ」の誕生

126



第4章

時間に対して、忍耐強くなる — 150

【コラム④】ナッツ・ビジネス以外のこと — 154

シンブルに生きよう — 161

ちよつと粗野に、シンブルに — 162

「○○すべき」と考えない — 166

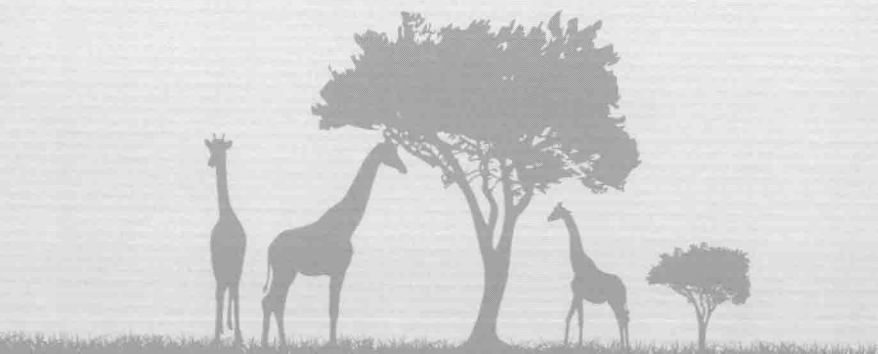
人とは「共感」でつながる — 170

「言葉は風」と考えれば、言葉に騙されない — 175

見栄は張らない — 179

「いい仕事」をしたいなら、まずは身体 — 184

【コラム⑤】微生物ビジネスとは何か — 187



「本物」であり続けよう

193

「だから、何？」といわせない

194

永遠を生きるがごとく夢を見よ、今日死ぬがごとく生きよ

198

「一・五流」の感覚でいる

202

自分のなかに、「いつでも帰れる場所」を持つ

205

「起」「承」「転」「結」を一人でやろうとしない

207

生きながら物語を紡いでいこう

210

【コラム⑥】ケニアの次の舞台はルワンダ

213

最後はやるか、やらないか

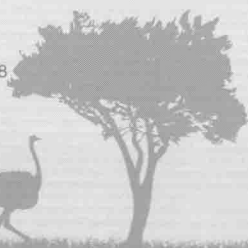
219

はみ出すなら、思い切りはみ出してしまおう

220

「グローバル」は、ムリしてめざすものじゃない

224



やりたいことは言葉にする

227

おわりに

生まれた時代をフルに生きる

233



はじめに

「君なら、もつとやれる」

「佐藤さんができたんだから、私でもやれるはず」

若い人からいわれて一番うれしい言葉は、これです。

この言葉を聞くと私は、「そうそう、君なら、もつとやれる」と背中を押します。
なにも適当にいつているわけではありません。自分自身が歩いてきた道のりを振り返ってみて心からそう思うからこそ、いうのです。

私の人生の旅は、東北の田舎から始まりました。

現在の宮城県南三陸町で少年時代を送っていたのは、ちょうど太平洋戦争の頃。日本中が本当に貧しい時代で、少しでも親に楽をさせようと鼻水を垂らしながら大八車を引いて山に薪拾いに行ったり、近くの村に野菜を分けてもらいに行ったりしていま

した。中学生の時に一家で東京に出てきて、二〇代でアフリカ大陸へ。ガーナ大学を修了後、ケニアでさまざまなビジネスを試み、三五歳で立ち上げた小さなナッツ・カンパニーを世界五大マカダミアナッツ・カンパニーに育てるまでになったのです。このナッツ・ビジネスは最終的に社員数四〇〇〇人、契約農家五万軒、農場の敷地面積東京ドーム七八〇個分まで拡大し、私はケニアで二五万人の生活に関わることになりました。それまで現金収入のなかった人たちがきちんと収入を得て、家を建てたり、子供を学校に通わせたりできるようになり、二五万人の生活が大きく変わりました。すでにケニアのナッツ・ビジネスからは身を引いていますが、今でも首都ナイロビから北西に四〇キロのシカ市にある工場に顔を出すと「ババ、ババ（スワヒリ語で「父親」の意味）」とみんなが笑顔であいさつをしてくれます。

東北の田舎からスタートした旅が、まさかこんな旅になるとは若い頃は想像もできませんでした。途中たくさん寄り道をしましたし、数えきれないほど失敗もしました。それでも、ここまでやってこられた。もし、「最初の一步」を踏み出していなかったらまさに後悔でいっぱいの年月をすごしていただろうと思います。だから、若い人には「君なら、もっとやれる」と声をかけることにしているのです。

みなさんは今、やりたいことをやっていますか。

今の生活は自分が求めているものと何か違うと感じていませんか。

きっと、それぞれにやりたいことがあるでしょう。

会社のなかで、今は日の当たらない地味な仕事をしているけれど、いつか花形の仕事をしてみたい。もっとやりがいのある仕事に転職したい。海外で暮らしたい。実家のある田舎に戻って何か始めたい。自分のビジネスを興したい。でっかい家に住みたい。すてきな洋服を着て、おいしい物を食べたいでもいい。

みなさんのなかには、大なり小なり「やりたいこと」が何かあるはずです。

みなさんの夢。せっかく生きているのに、夢をそのまま胸のなかに眠らせておく手はないでしょう。

この本に書くことは、昔の自分に向けたメッセージです。

何かやりたくてうずうずしていた、あの頃の自分。でも、何をどんなふうに始めればいいのかわからなかった、あの頃の自分。そして、ようやく一步を踏み出してみたものの、何をやってもなかなかうまくいかず、ヘンに力んでいた自分。どこか焦って

もいた自分。

日本の会社で働きながら、「これは本当に自分のやりたいことなんだろうか」と考え込んでいる人。いつかやろうと長年、温めていることがあるのに最初の一步を踏み出せずにいる人。勇気をもって何かを始めてみたものの、カネなし、コネなしで八方ふさがりの状態にある人。

まだ火もともっていない夢であっても、小さな火がようやくともし始めた夢であっても、ゴーゴー音を立て燃えている夢であっても、自分の「夢」と格闘している若い人を見ると、昔の自分とピタリと重なります。

そんな人には、

「夢はゆっくり追いかければいいんだよ」

と声をかけたくります。

実をいうと、私は「夢」という言葉が好きではありません。ふわふわとしていて「今日の行動」につながらないイメージがあるからです。私がこの本でいう「夢」とは、「こうなりたい」「こうしたい」といった具体的な目標やゴールと結びついたもの。みなさんにも、追いかけるならそういう「夢」を追いかけてほしいと思います。

消えない情熱を持ち続けること。

それが夢を叶える秘訣です。

今ならよくわかります。

でも、二〇代、三〇代の頃はわからなかった。ひよつとすると、四〇代の頃も気づいていなかったかもしれない。でも、七五歳になった今なら、確信をもってはつきりといえます。

人生は、みなさんが思うよりもずっと長いのです。

昔は「人生五〇年」といわれましたが、今の時代は「人生一〇〇年」としてもあながち嘘とはいえません。多くのみなさんにとって明らかに、これまで「生きてきた時間」よりも、これから「生きていく時間」のほうが長いのです。時間はたっぷりある。そして、人生は思いもよらない可能性に満ちています。今は想像もできないような旅が待っているかもしれない。だとしたら、やりたいことがあるのに動きださずにいるのは、もったいなさすぎます。

燃える情熱より、消えない情熱

いつも、自分が一〇代の少年のままの気分で生きているので、年齢を意識することはあまりありませんが、私は今年で七五歳になります。仮に「人生一〇〇年」として、あと二五年。そう考えれば、今から何かを始める年齢ではありません。

ところが、私は今、ルワンダでナツツの苗を植えています。

三四年間経営してきたケニアのナツツ・ビジネスをケニア人に譲ったのち、七三歳でルワンダで新たにナツツ・ビジネスを立ち上げたのです。

ルワンダといえば、一九九四年に内戦で一〇〇日間に少なくとも八〇万人が虐殺されました。

遠いアフリカでの出来事ですから、ニュースでルワンダ内戦の様子を見ていたとしても、よく覚えていないかもしれません。それまで何百年と同じ土地で暮らしてきたツチ族とフツ族が植民地時代以降、対立を煽られ、それがジェノサイドという形で

爆発したのです。支配的立場にあったマイノリティのツチ族が過激派のフツ族によって本当にむごたしく殺されました。

内戦が終結してから今年で二〇年になりますが、私が長年にわたりビジネスをしてきたケニアからやってくると、国全体がいまだに喪に服しているような印象を受けます。

そうしたなか、ルワンダの首都キガリから車で二時間くらい、チョホハ湖のほとりにある農園に、膝丈ほどのマカダミアナツの苗をせせと植えているのです。すべては、二〇一二年にベラホ・イグナスという人物にキガリの街中で呼び止められたところから始まりました。

ベラホさんはソルボンヌ大学を卒業後、フランスの市民権を得て、パリで国際機関の職員として活躍していましたが、悲惨な内戦から母国を救いたいと職をなげうって帰国、戦線に参加したという経歴の持ち主です。

その彼が「ルワンダの再建に身を捧げたい」「ナツツ・ビジネスでルワンダの経済を元気にしたい」と私に声をかけてきたのです。私が、長年ケニアでナツツ・ビジネスに取り組んできた経験を、ルワンダで活かしてほしいというのです。